哲學研究　第二十四號

獨逸唯心論に於ける哲學的認識の問題（完結）

田邊　元

十

ヘーゲル論理學の特徴が其所謂辯證法にあることは今改めていふまでも無い。思惟の規定は Verstand の段階に於ては靜止固定したものであつて、所謂矛盾律に由り何處までも他との區別對立に於て存するものであるが、dialektisch 或は negativ-vernünftig の段階に於ては各々の思惟規定は自己自身を否定して其反對に移り行き、斯くて spekulativ 或は positiv-vernünftig の段階に於て相反對する規定が綜合統一せられて、其等が此中に廢止擧揚せられて全然流動的となる。普通の形式論理學は卽ち單に悟性的思惟のみを抽象して考へるものであつて、眞に具體的なる理性の思惟は斯かる反對者の生產、其止揚の過程全體を意味しなければならぬ。斯かる過程を自覺することが辯證法であつて、此が卽ち論理學を成すのである。辯證的過程は決して思惟

以外の力に由つて起されるのでなくして思惟其自身の自發的運動であり、其自己發展である。此過程により初め內容の最も貧少なる抽象的特殊の規定たりし措定が其 an sich sein の段階から anderssein の段階に移り、自己の反對者たる特殊反措定を生產して、之を更に止揚して具體的なる普遍に進み、綜合の段階に達するのである。之に由り最初出發點に於て特殊が直接に an sich の狀態にあつたのが、其反對者を自己に對し區別して für sich の狀態に入り、更に再び之に於て自己に復り、特殊を含む一層內容の豐富なる間接的具體的の普遍たる an u. für sich の狀態に於て循環を終る。然るに一度循環をなせる思惟は更に其運動を始め、高度の段階に於て循環を繰返へし、斯くして無限の過程を成す。無限とは終無しといふ意味でなく(此は惡しき無限である)常に自己の內に發展の契機を含む循環を意味する。此過程に由つてヘーゲルは最も內容の貧少なる空虛の思惟規定「有」から出發して漸次具體的の規定を導き、凡ての範疇を純粹思惟に由つて演繹したのである。抽象的なる有から出發するといふことは卽ち思惟がある以上必ず何かであると思惟せられること(卽ち prädizieren せられること)を豫想し、此が何等の制約を有せず全然抽象なる場合に持つ所の意味が「有る」といふことであるから、意味の前に存在を豫想せず、純粹に意味の立場に立つて存

在を演繹する先驗論理學の立場を採るものであると解することが出來るであらう。而してヘーゲルは單に斯かる純粹論理學を辯證法に由り建設したのみではない。更にan sich seinの段階にあると考へられる論理學の理は其自身の力に由つてanderssein の段階に移り、反措定として自然を生じ、更に之を自己に對するfür sich seiendesとして止揚し、an u. für sichの段階に於て精神に發展する。此は初めan sichの狀態にあつた理が其無限性を自覺した狀態であつて、理は一度其反對の自然に墮して之を自己の內に攝取し、前より高き狀態に於て自己に復り、其發展を果たすのである。自然哲學と精神哲學とは卽ち之を示す。斯くて辯證的過程は單に論理的思惟の過程たるのみならず同時に實在の過程となる。實在は單なるSubstanzでなくしてSubjektである。自己のZustandをGegenstandとして自覺したものでなければならぬ。自覺とは思惟が一度自己を否定して反對に移り、更に之を否定擧揚して其を自己に綜合することに由り、再び自己を肯定する絕對否定の過程に外ならない。an sichに理たる論理、anderseinに於ける理たる自然も未だ實在の眞相でない。精神に於て理がan u. für sichの段階に進み自覺の狀態に達して始めて實在の眞相が發揮せられる。眞の實在は理の自覺過程でなければならぬ。而して自覺の過程は循環である。過程の終

が其始に還る所に全體としての眞が實現せられ、此實現が卽ち絕對となる。絕對はシェリングの主張する如く天才にのみ許されたる直觀の知る所でなくして、何人も能くする理性の思辯に由つて達せられる。辯證法は卽ち其認識の方法に外ならない。而して論理學に於て此方法を開展するのは此方法の外に立つて之を觀察することではない。自ら此辯證法の內的必然に歸一して之を實行することである。論理は意味の自己發展である。幾度思惟しても同一なる、又現に思惟すると否とに拘らず存立する意味の體系である。哲學者が自ら辯證的運動を行つて知る所が卽ち理其物の發展なのである。此處に論理學の認識の特殊性が存する。ヘーゲルの論理學は思惟する主觀無き理其物の開展である。

思惟の規定を正反合の順序に發展することは已にカントが屢々之を用ゐて居るのみならず、實に其哲學の全體が此三分法に從つて組織せられて居る。フィヒテに於ては其知識學の三根本原理が恰も此關係を有し、其說く所の反省がヘーゲル辯證法の先蹤となることも否定出來ない。シェリングに至つては更に精神と自然との同一を絕對と考へ、又其自然哲學を分極の概念に由つて組織したのであつて、三分法は其哲學全體の組織に含まるゝ圖式と見做される。併しながらヘーゲルが其精神現象

論の序文に批評した所に據れば(Hegel, Phänomenologie des Geistes. Lassons Ausgabe. S. 33 ff.)此等の哲學者に於ける三分法は畢竟哲學組織の圖式以上に出でない。殊にシェリングに於ては此形式に適合せしむる爲め經驗から得た規定を隨意に配當して、唯「對立の循環を立するに止まり、人をして事物自身の何たるか、對位の一方と他方との何物なるかを知らしめることが無い」(S. 33)。又主觀、客觀、實體、原因等の重要なる規定も全く無思慮、沒批評的に使用せられて居るのであつて、此等を思惟自身の發展に由つて演繹するといふ如きことは全く行はれて居ないのである。ヘーゲルの辯證法は此等の單なる圖式としての三分法でなく、思惟其自身の活動に由つて發展するものなることを特色とする。思惟は或特殊の規定から必然其反對の特殊規定を產み、而して之を綜合して具體的普遍に發展するのである。辯證法は思惟其自身の內面に發する必然の過程である。思惟は單に與へられたる內容を或形式に組織するのでなくして、此辯證的過程に由り必然に內容を生產するのである。思惟の內容とは論理の立場にとつては思惟規定より外に無いのであるから、其辨證法に由る必然の發展は卽ち內容の生產に外ならない。斯くて存在と思惟とは同一となる。辯證法は思惟の意味自身の發展であつて、此が存在を產出するのである。

然らば辯證法の本質を成す思惟の一規定が其反對の規定を產出して、思惟は必然前者から後者に移り、更に兩者を綜合して一層具體的の規定に發展するといふことは如何にして出來るか。其が論理的意味の自己發展であるといふのは如何なることであらうか。ヘーゲルに據れば一の思惟規定は必ず其矛盾反對の規定を產出し、思惟は前者から後者に移り行くものであつて、之を辯證的といふのであるが、此は如何にして可能なのであらうか。我々は他方に於て矛盾律なるものが思惟の原理であつて、思惟は之に背反すべからざることを敎へられて居る。ヘーゲルは此原理を以て單に悟性的思惟の規範であつて、理性の立場から見れば凡てのものが矛盾に陷るのが必然であり alle Dinge sind an sich selbst widersprechend(Logik, II, S. 67) といふのが凡ての論理の根本原則であると主張して居る。此は如何にして矛盾原理と調和し得るか。余の考によれば辯證法は決して矛盾律を否定するのではないと思ふ。思惟は如何にするも此原則に背して正しき思惟たることは出來ぬ。若し之を否定すれば凡ての思惟が不可能となり、之を否定するといふことも出來なくならなければならぬ。辯證法も此原則を認容して之と矛盾せざる別の根據に立つものでなければならない。然らば辯證法の根據は如何なる點にあるか。其は立場の進轉といふこ

とに存するのである。我々が「Aである」と斷定するのは必ず或立場に立つて之を爲すのであつて、其同一の立場に立ちつゝ「Aでない」と斷定することは矛盾律の許さゞる所である。若し此が出來るならば思惟は全く混亂に陷り其自身不可能とならなければならぬ。辯證法も亦之に由つて不可能とならざるを得ない。然るに「Aである」といふ斷定と同時に「Aでない」といふ之に矛盾する斷定が成立するのは、前者と異る立場に立つから出來るのである。而して前者が必然後者を産み出し、思惟が一方から他方に移り行くといふのは、前者の成立する立場が必然後者の成立する立場を半面に豫想するといふことである。何故に然るかといへば、一の立場を固定するといふことは卽ち其反對の立場を否定することであつて、其點から見て規定することは制限することであり、具體的なる全體を抽象的の一面に限ることとなるからである。「Aである」といふことを斷定せしむる立場を取るといふことは、其反對の「Aでない」と斷定せしむる立場を否定することである。後者も前者と同じく an sich には可能なのであつて、前者は其半面に後者を豫想し、全體は此兩面を荷ふ。前者を取るのは後者の可能を豫想して之を否定することであつて、若し此が不可能ならば前の立場を取ることも亦不可能とならなければならぬ。否定の可能ならざる肯定なるも

のは其自身無意味である。具體的には兩者の綜合に當る全體者があつて、其一面として各一つが成立するのである。「Aである」といふ一の措定をなすことは其半面に「Aでない」といふ反措定の可能を認めて之を否定して居るのである。其故前者は必然後者を伴ふのであつて、若し前者のみが本來後者を俟つことなく成立するものならば、之を產出することは出來る筈が無い。產出するといふのは先に否定し置いたものが前者の定立と共に再現せられることである。措定と反措定とは元來相俟つて始めて意味を有するものであつて、一方なくして他方を思惟することは出來ないのである。一方が意味を有する爲めには他方を豫想しなければならぬ。而して兩者が共に成立するのは思惟が一方の立場から他方の立場に轉ずるから出來るのである。若し一方の立場にのみ立ち、他方の立場を否定するのみならば、之を反措定として定立することは出來ぬ。純粹に論理的意味の見地から見るならば、前者の立場を取るといふことは半面に後者の立場を同等に可能なるものと認めることを含蓄し、之に由つて措定は必然反措定を產出するのである。ヘーゲルの論理學は卽ち意味自身の發展を說くものとして、一の立場が必ず反對の立場を豫想することを認め、兩者を同等の資格を有するものとするのである。

此樣に思惟の一規定が反對の規定を産み出すといふのが本來前者の定立に際し否定して置いた反對の立場を再現することであるとするならば、思惟が更に兩者の綜合に進むといふのは自然のことである。一の立場を取るといふことは之と反對の立場を否定することであり、而して斯くすることは兩者を含む全體に就いて其一面を定立して他の半面を否定するといふことなのである。其故思惟が一の規定を措定するのは實は初から之と其反對の反措定とを含む全體者が與へられて、其中から前の一面を抽象して出來るのである。初から之のみが、あるのならば其反對に移ることも今述べた如く出來るものでなく、況や兩者を綜合するといふ如きことは出來べからざることとなる。然らずして兩者を含む全體者があつて、其一面を抽象して措定の立場が固定せられるから、必然思惟は反措定の立場に移り、更に兩者を綜合して初の全體者に復り、此が實現せられるのである。其故思惟の進行は卽ち同時に其基に還ることである。ヘーゲルが das Vorwärtsschreiten in der Philosophie vielmehr ein Rückwärtsgehen und Begründen sei. とふひ、das Vorwärtsgehenr ein Rückgang in den Grund, zu dem Ursprünglichen und Wahrhaften ist, von dem das, womit der Anfang gemacht wnrde, abhängt, und in der Tat hervorgebracht wird.....Dies Letzte, der Grund, ist denn auch dasjenige, aus welchem das Erste

hervorgeht, das zuerst als Unmittelbares auftrat (Logik I. S. 64) といふのも之に外ならない。思惟の或立場に於て或規定を下すのは an sich の段階である。其半面には反對の立場を否定して居るのであるから、必然之に移りて anderssein となり、für sich の段階に進まなければならぬ。併しながら此段階も第一の段階と同じく兩者を含む全體者の基に於て出來るのであるから、思惟は更に此基に還り、anderssein に於て in sich reflektieren し、an u. für sich の綜合の段階に達するのである。思惟の反省とは基に還ることである。若し此基が無かつたならば思惟は進行することが出來る筈は無い。思惟は此樣に綜合に由つて其基に還るから其成果は普遍的にして具體的たることが出來る。若し初に特殊を含む普遍の基が無く、普遍は唯特殊の共通相を統一して生ずるといふものならば、其は特殊よりも內容の貧少なる抽象的のものたらざるを得ない。然るにヘーゲルの主張する如く普遍的なるもの程具體的であるといふのは、つまり其が多くの特殊に基となるものの實現であつて、特殊は其限定と考へられるものであるから、普遍にして具體的となるのである。ヘーゲルは Das Allgemeine ist die Seele des Konkreten, dem is inwohnt, ungehindert und sich selbst gleich in dessen Mannigfaltigkeit und Verschiedenheit. Es wird nicht mit in das Werden gerissen, sondern kontinuiert sich unbetrübt durch dasselbe,

und hat die Kraft unveränderlicher, unsterblicher Selbsterhaltung (Logik, II, S. 39) と云つた。普遍は具體的全體であつて、特殊は抽象的部分である。思惟は特殊から發して普遍に進むに從ひ漸次其基となる全體者を實現するのである。Das Wahreist das Ganze. Das Ganze aber ist nur das durch seine Entwicklung sich vollenedende Wesen. (Phänom. S. 14) 此が概念に外ならない。辯證法は概念發展の過程である。

八

前節に述べた所の措定、反措定綜合の三段階の關係を論理學の出發點となる最も抽象的の思惟規定、有、無、成の三つに就いて考へたならば如何に解せられるであらうか。「有といふのは純粹に直接的なる全然何等の媒介を含まぬ規定である。何々で有るといふのでなくして唯「有る」といふのである。斯かる「有る」は純粹抽象であつて、從て純粹否定であるから卽ち無に外ならない。純粹の有は卽ち純粹の無である。兩者は同一である。有と無とのWahrheitは兩者の何れでもなくして兩者の統一、卽ち有が無に移り、無が有に移る運動卽ち成でなければならぬといふのが、ヘーゲルの考である。併ながら此處に有と無とが同一であるといふのは決して同一の立場於に

て有と無とが同一であるといふことではあり得ない。若し左樣ならば何等の思惟も不可能である。元來具體的には何かであるのを、抽象的に何でもないと考へ、而も此反措定の立場を半面に豫想しながら、之を否定して唯「有る」と措定することに由つて純粹の有といふ規定が出來るのである。併し此は半面には何でも無いといふ無を豫想するから、直に之を反措定として產出し、而して實は兩者は同一具體者の抽象的半面であるから、具體的には有となり又無となるものが全體として綜合の段階に現れる。此が成である。然るに成は思惟の規定が本來規定たる限り靜止固定を要求する故に、eine haltungslose Unruhe, die in ein ruhiges Resultat zusammensinkt (Logik, I, S. 109) たるを免れず、Bestimmung des Ganzen (S. 110) としての有に達する。之が元來有と無との基に存した「何かである」即ち定有 Dasein である。Das Werden so Übergehen in die Einheit des Seins und Nichts, welche als seiend ist, oder die Gestalt der einseitigen unmittelbaren Einheit dieser Momente hat, ist das Dasein (S. 110)。即ち有と無とが本來定有を成として其具體的なる基に豫想し、其全體の一面の規定として必然一が他を伴ひ、相俟つて全體の規定に進まんとするものなることが知られる。此場合有と無とが同一であるといふのは此兩規定が同一なる全體者の半面の規定として、其全體者の規定が未だ現れて居ない

爲めに各々の立場が自由に轉換し得られることを意味するに過きない。同一の立場に於て有と無とが同一であるといふことはいはれる道理が無い。

今述べた所の關係は範疇發展の何れの段階に於ても認められるのであつて、如何なる規定も其が全體の一面に止まる限り常に其反對の立場を産出し、之に於て再び自己に還り、兩者の綜合として其基となる全體者の規定に進まうとする。全體者なるものは部分的規定に對立するものでなく、其綜合としてのみ可能である。若し部分的規定と對立し、之を排拒するものならば自ら特殊に反對するものとして特殊に墮し、部分となることを免れない。眞の全體は部分を通して實現せられるものである。而して此樣に部分を通じて實現せられる所の全體は靜止固定したものでなくして、其實現の過程を通貫するものであるから、內面に運動發展を含蓄するものである。有と無との綜合が成である如く、凡ての反對する特殊規定の綜合は直接には其等を通貫する轉移流動でなければならぬ。中に流動を含まぬ規定は其反對を産出して、流動の契機とならなければならぬ。具體的全體は唯抽象的特殊の發展を通ずる流動の過程としてのみ實現せられるのである。而して一度流動の全體として規定せられたものも、其が猶特殊の固定を脫せざる限り、更に次の段階の發展に於て一

層高級の流動的全體に綜合せられ、斯くして漸次に最高の段階に自己を完成し行く。ヘーゲルの論理學に於ける最も具體的の思惟規定たる概念は卽ち是れである。無限は概念に於て始めて現れるのであつて、有限は其が有限なる限り常に自己の反對を產出して自己を否定する。無限とは流動の全體たる循環過程其物に外ならぬ。彼の論理學は實に思惟の無限なる流動的全體の自己發展としての範疇の生成史である。然るにロッツェの如き論理學の意味を充分明に認めた人もヘーゲルの辯證法を以て單に概念排列の圖式と考へ、一の概念が其反對に轉ずることの背理であるといふ理由により、思惟の辯證的發展を否定しやうとして居る(Lotze, Logik. §. 193—196)。氏は有限なる規定が自ら自己を否定するのは概念が反對に轉ずるからではなく、或時に妥當した概念も其が有限なる爲め永久に其妥當性を維持することが出來ないからであつて、概念の辯證的自己否定なるものは承認すべからざることであり、唯現實の事物が一の概念の範圍(外延)から反對概念の範圍に移る如き性質を有するのであると云つて居る(Mischs Ausg. S. 249—251)併しながら純粹なる論理的概念に就いて其の妥當する現實の事物の進行といふ如きことを考へるのは論理學を經驗科學に墮とすことであつて、眞に純粹なる論理學の立場から見るならば、或對象が一の概念の範

圍から他の概念の範圍に移るといふのは、卽ち思惟規定の發展であると考へなければならぬではなからうか。勿論ヘーゲルの一の概念が反對概念に轉ずるといふのは、曩に述べた如く矛盾律に反して一の概念が反對概念になるといふことではあり得ない。其は思惟が一の概念から反對の概念、更に其綜合に發展するといふことでなければならぬ。而して此は立場の進展に基くものと考へるとき、矛盾律に背くことなく、ロッツェのいふやうに背理(S. 249)となる恐が無い。ヘーゲル自身の語は此點に誤解を起させ易く、宛も其立脚地は矛盾律を否定するものゝ如くに見えるけれども、併し深く考へるならば矛盾律を承認して、更に流動的全體者の思惟に進まんとする具體的の立場として其可能を認めることとか出來ると思ふ。一の抽象的なる立場を固定する限りAは非Aとなることは不可能であつて、斯かることを主張するならば背理たること勿論である。而して斯かる立場に立つて普遍を思惟するならば普遍なるもの程抽象的であり、內容の規定が貧少であるといふ普通の形式論理の思想を脫することは出來ないのであらう。ヘーゲルの辯證法の特色は一の立場に立つて特殊の規定を下すのは具體的なる全體を一面に限定するものであるから、必然他の半面を豫想し、此立場に轉じて反對の規定が必然產出せられ、全體は兩特殊規定の綜

合に於て實現せられるといふことを洞觀した所に存する。思惟は一の立場から反對の立場に運動するから、矛盾する二つの規定を必然的に產出することが出來るのである。而して此は思惟本來の力に由るのであつて、已に一の立場を固定し、一の特殊規定を下すといふことに其反對と綜合とに發展すべき基が含蓄せられるのである。此點を明かにしなければ辯證法の根據を正當に知ることは出來ないと思ふ。

併しながら右の如く思惟の立場の變轉運動が辯證法の基礎を成すといふことは、ロッツェに先だち辯證法の精細なる批評を試みたトレンデレンブルクの考へる如く(Trendelenburg, Logische Untersuchungen, I. S. 42)此論理學が空間的運動を豫想するといふことにはならぬ。彼が辯證法に對し「純粹思惟の彼岸にある何物かを背景に發見するであらう」といひ(S. 37)、「成の表象が先だつことなくば有と無とから成が成ることは出來ぬ」(S. 38)といふ如きは、余が已に述べた所に由つて豫知せられ、猶次に詳說しやうと欲する考に一致するものであるけれども、彼が其背景にある或物を空間的の運動と見做したのは全然獨斷的なる形而上學の立場といはなければならぬ。氏はヘーゲルの Das dialektische Moment ist das eigene Sich-aufheben solcher endlichen Bestimmungen und ihr Uebergehen (Encyclop. S. 105) といふのを、一の思惟規定が單に其否定に移るとい

ふ論理的否定でなく、他の新しき肯定概念を以て一の概念を否定する所謂 reale Oppositionでなければならぬと解し(S. 44)而して斯かる reale Oppositioen をなす反對概念(contraire Begriffe, nicht contradictorische Beg.)は現實の直觀を豫想して始めて得られると云つて居るが(S. 45－47)、併しAの矛盾概念非Aも其基に兩者を含む普遍者を豫想するのであつて、其普遍者の全體に於てAを否定するのであるから、論理的否定もトレンデレンブルグの解する如く全然無規定なるものでなく、ヘーゲル自身がいふ通り肯定と同樣に positiv なのである(Encycep. S. 133－134)。之を無規定と見るのは抽象的の見解であつて、斯く解せられた論理的否定に對しては所謂 reale Opposition は其具體的なる見方となるに過ぎない。從つて此意味に於ける非Aの內容が新に直觀に由つて與へられたる必要は無いのであつて、已にAの措定に豫想せられた普遍的全體の直觀に由つて與へられて居るのである。思惟は其自身の意味に由つて必然Aから非Aに轉じて自己發展をなす。面して其基となる直觀はトレンデレンブルクの考へる空間的運動の表象といふ如き者ではない、唯思惟自身の基となる意識發展の體驗に外ならない。彼の主張する如き考は直觀と思惟との關係を解することが外面的なる爲めに起るのであつて、思惟は其外から與へられたる直觀を組織するものであ

ると云やうな思想が其根柢にあると思ふ。斯く解すれば實際措定Aに對する反措定非Aの內容はAの思惟の外から來り加はると解する外無いであらう。併しながら余の考では實はAの措定其物が非Aの反措定の內容を豫定すると思ふ。否Aと非Aとの綜合的全體の直觀がある所に其一面の抽象としてAの措定が始めて可能となるのであつて從つて非Aの反措定も其半面に豫想せられ更に綜合が全體の規定に進み得るのであると思ふ。初にAの措定が純論理的にあつて、後に外から直觀により非Aの內容が與へられ、反措定が可能となるといふ如きものではない。而してAと非Aとの差にある全體者の直觀といふのは所謂經驗に豫想せられる空間的直觀といふ如きものではない。純粹思惟規定卽ち範疇の發展に豫想せられる直觀は意識の內面的發展の體驗としての直觀である。此は思惟の外から之に對し與へられるものでなく、思惟の基となり、其一面の發展として思惟が現れる如きものである。而も此は未だ思惟の規定を經ざるものとして論理的の存在を有せざる非有であるから、思惟が之を豫想するといふことは思惟が如何なる有をも假定することなく、純粹に意味に從つて自發自展するといふ外に外ならない。純論理的意味の發展として辯證的思惟を考へることこそ不可能でないばかりでなく、此が正に當然の解釋とい

ふべきものと思ふ。トレンデレンブルクの如く「此無假定なる論理學の豫想は空間的運動である」といふのは(S. 42)、獨斷的形而上學の主張であるといはなければならぬ。

九

余は前節に於て辯證法が意味の發展として純論理的思惟の進行を表はすものなることを述べた。Aの規定は非Aの規定を豫想することなしには意味を有することが出來ない。而して又此兩者は其綜合を豫想することなしには意味を有し得ないのであつて、Aの措定が已に非Aの反措定と兩者の綜合とを其基に含蓄するから、思惟は必然Aから非Aに轉じ、兩者の綜合に發展するのである。而も此綜合Bも亦同樣に非Bを豫想し、其綜合Cに發展し、以下追つて此の如くなるに由り辯證法の過程は無限の循環過程となるのである。此は最初の規定が直接態として最も抽象的なるものであつて、其基には具體的なるものを豫想し辯證的發展に由つて其基に還り具體者を實現せんとするのに外ならぬ。然るに此具體的なる基は未だ思惟の規定を經ざる間に思惟に對しては非有であるから、思惟は自己の外に何等の存在を豫想とすることなく、自己の意味に由つて發展するといはれるのである。併しながら思

惟に對する非有は絶對の無ではない。若し思惟が其基に全然何物をも豫想することがなければ實は思惟自身が不可能となる。或は一の意味が意味自身を定立するといふかも知らぬけれども、一の意味は反對の意味と兩者の綜合とを豫想することなしには意味たることが出來ない。然るに此等は前者に先だつて意味として成立することは出來ぬ。唯前者の成立の基に未だ實現せられざるものとして豫想せられるのでなければならぬ。即ち一の意味は未だ實現せられざる具體的の意味を其基に豫想するのであつて、意味は其發展實現の思惟作用を全然離れては無意味とならざるを得ないのである。然らば思惟發展の基となる非有とは如何なるものであるかといふに、此は未だ意味に由つて規定せられたものでないから存在として有に定立せられざる、然も未だ實現せられざる意味を含むものとして後に有に定立せらるべきものでなければならぬ。即ち意味と存在とが未だ分れざる、當爲即事行といふべき意識の純粹活動でなければならない。即ちヘーゲルの辯證法に基となるのはフィヒテの純粹事行に外ならぬ。トレンデレンブルグは前節に述べた如くヘーゲルの辯證法の基となる直觀を空間的運動の表象と考へたのであるが、眞に辯證法の基たる直觀は唯意識の內面的發展の直觀に外ならない。辯證的運動の基たるもの

は空間的運動でなくして意識の發展である。彼が自己の哲學上の立脚地から考へる如く運動があつて意識の發展があるのでなく、意識の發展があつて空間的運動も可能となるのである。勿論之に對してトレンデレンブルグは自己の意味する運動が現象的運動でなく、實在の根柢に存して內外兩界の基となる運動であつて、意識の發展も內面的運動に外ならないと主張するであらう。併しながら此の如き思想は古き獨斷的實體論の遺物であつて、彼の運動說も批判主義の立場から觀念論化せられなければならぬ。辯證法の豫想する所は意識の發展卽ち純粹活動に外ならない。彼が有と無とから成が發展する基に必要であるといふ成の直觀は空間的運動の直觀でなく意識發展の直觀である。辯證法は此意識發展の內面的過程の全體の中から、最も抽象的なる一面をとつて最も空虛なる規定「有」を揭げ、之を其初として漸次基にある全體中に於て度外視せられたる反對の規定を再現して、綜合により全體者の規定に進まうとするのである。此點から見てトレンデレンブルクが、辯證法は原始的抽象を還元する術に外ならないといふのも (S. 95) 理由あることであつて、ヘーゲル自身が思惟の前進は其基に復歸することであるといふのに相當すると解することが出來る。ヘーゲルが論理主義の立場から、其復歸すべき基を思惟に對し非有た

るに由り全く其論理學中に說く所が無いのは、先驗心理學の立場から直觀に由つて補充すべきものなのである。此處にフィヒテの知識學とヘーゲルの論理學との本質的なる關係が存すると思ふ。

意識の發展は純粹事行の無限の過程である。フィヒテの知識學は之を自我が非我を定立して其を克服する過程として知的直觀に由り知らんとするものである。其方法が先驗心理學の再構成的主觀化でなければならぬとは曩に述べた如くである。ヘーゲルの辯證法は論理的意味の立場から其過程全體を抽象的なる規定から具體的規定に進む思惟の發展に由り概念化せんとするものに外ならない。其思惟發展の基には純粹活動としての意識發展の直觀が無ければならぬと今述べた如くである。而して純粹活動たる意識發展の過程全體を論理的に概念化するのは、唯抽象的規定に發し、反對綜合の發展を通じて具體的全體を實現することに依る外無いのであるからフィヒテの自我の論理的認識はヘーゲルの論理學より外にあり得ないこととなる。フィヒテの知識學の根本組織が恰も辯證的關係を成すのも偶然ではない。思惟の規定は本來靜止固定的なるものである。其故之を以て活動の過程を認識するには唯個々の規定が相互必然に發展せられる思惟の辯證的運動に依る外無い。

而して具體的なる全體を認識するのは特殊を排する抽象的普遍でなく、特殊を貫通する具體的普遍に於てする外無いのであるから、辯證法は自我の論理的方面を表現するものとしては偶然的ならぬ、必然的本質的の意味を有するものとなる。フィヒテに始まる唯心論がヘーゲルに發展すべき必然の道は此處に存する。フィヒテの知識學とヘーゲルの論理學とは相俟つて直に我々を哲學的認識の中心に徹せしめるものである。我々は自我の本質も直觀的に認識するにフィヒテの知的直觀に依る外無く其過程を論理的に認識するにヘーゲルの辯證法に依る外無い。辯證法は自我の活動を論理的に規定する方法としては唯一のものであつて、ヘーゲルの論理學の不朽の意味は實に此點にあると思ふ。固より彼の開展した範疇が全然思惟の辯證的運動のみに由つて現はるゝものであるといふことは疑を挾まざるを得ないのであつて、殊に余は Sein から Wesen に發展する過程に純論理的には理解し得ないではないかと思はるゝ疑點を認め、又 Lehre vom Wesen に屬する各段階の範疇の關係等にも發展を論理的に追跡し得ざる如きものがあるやうに思ふのであつて(勿論此等は專ら余の理解力の不足に因すること疑無いが)、トレンデレンブルクが「若し吾人にして完結せる體系の眞中に身を置き、最初の起發點から最終の發展まで不斷の連絡を辿

るならば、所々に連續的進行を破り、唯人爲的に再ひ初を新にする著しき不均齊を認めるであらう」といひ、以て辯證法の內在的關係を拒むのも(S. 76)理由の無いことではないと考へる。併しながら全體から見て辯證法が論理的意味の發展として自我の純粹活動全體の過程を認識せんとするのであるといふ其本質には、到底無視することの出來ない永久的の價値があると信ずる。余は一方に於て辯證法がヘーゲル自身の外面上排斥した直觀の基を豫想するものなることを主張すると同時に、意識の具體的なる活動全體を論理の立場から規定せんとする方法としては辯證法を措いて他に求むべからざるものなることを主張したい。辯證法は單なる思想排列の圖式でなく、思惟の自己發展の必然的なる形式である。抽象的なる規定から發して其具體的なる基に還り之を概念に實現することに由つて前者を基礎附けするのは論理的思惟の本質である。今日フィヒテ、ヘーゲルを排して直にカントの源流に遡り、其批判主義の立場から純粹認識の論理學を組織せんとしたコーエンの如き人が、其思想開展の大體に於て辯證法的ならざるを得なかつたも之に因由するものと思ふ。先驗論理學の方法としてヘーゲルの辯證法は永久渝らざる新しき意義を有しなければならぬ。假令ヘーゲルの論理學其物が幾多不備の點を有するとも、其方法は不

朽である。我々は其開展した思想の細點に躓かされて其底に流れる深き精神の本質を逸してはなるまい。

辯證法は自我の純粹活動を論理的に概念化する方法である。其活動の過程全體を思惟に由つて規定するものである。而して此自我の過程の概念化は自我の外にある思惟の作用が之を行ふのでなく、自我の活動其自身の中に宿れるdas Logischeの力に由つて自我自身が自己を形成して論理的範疇の體系に自己を表現するのである。其故論理學は思惟の學たると同時に實在たる自我の自己表現として形而上學たらざるを得ない。オイケンの知識學が實在たる自我の直觀の學たるに對し、ヘーゲルの論理學は實在たる自我の概念化學である。ヘーゲルの論理學が同時に形而上學であるといふ意味は右の如きものでなければならない。

併しながら論理學の範疇發展の基となる直觀は自我の活動に含まれる內面的關係の直觀である。純粹事行の行に內在する關係の直觀である。自我の活動、意識の發展に內在する關係が其關係せしめらるゝ項の內容如何に拘らず、同一普遍の關係を有する、之を特殊者の綜合に由つて概念的に實現するのが辯證法である。其關係の項其物の內容は到底論理的思惟の能く規定する所でない。此處に論理學の限界

がある。フィヒテの知識學の我々に知らしめる所も亦純粹事行の行の形式に限り、事の內容は自我の自らも知る能はざる神秘の背景に源を發するものであつて、此は到底普遍必然的に規定する能はず、唯はたらいて始めて知られるものなる事は已に第四節に述べた。知識學は先驗心理學的方法により普遍必然的なる客觀的認識を主觀化して原體驗に還元する再構成の方法に於てのみ其が哲學的認識となるのであるから、(今暫らく道德の方面を度外視し認識の方面に就てのみ考へる、)其立場から知る所が原體驗の內面的關係の普遍的方面に限るのは當然のことといはなければならぬ。ヘーゲルの論理學は卽ち此關係の普遍的方面の概念化を目的とするのであつて、恰もフィヒテの知識學理(論的)の Kehrseite を成すものである。其故之により規定せられる所も全く純粹活動の全體的過程に含まるゝ普遍的關係に止まり、活動に由つて現實となる意識の內容自身は之を辯證法に由つて演繹することは出來ない。此は如何にしても論理の完全に支配することの出來ない超論理的の境に屬する。フィヒテの知識學に於ける自我、非我、絕對我の關係はヘーゲルの有、本質、概念の三つに由つて之を論理的に規定することが出來るであらう。併し非我の內容は到底辯證法に由つても繹することは出來ない。辯證的思惟の規定は唯自我の活動に內在する普遍

的關係に止まる。思惟は一般に直觀の內面的關係の普遍的表現である。論理の世界は普遍的關係の世界である。範疇に概念化せらるべき普遍的關係を含む純粹事行の行に由つて始めて現實となる事、卽ち意識の內容其物は到底之を論理に由つて演繹することの出來ぬ超論理的神秘の境に屬するものである。已にフィヒテの知識學に對しても超へることの出來ない物自體の限界があつた以上、其 Kehrseite に當るヘーゲルの論理學に對しても亦同じ限界が無ければならない。現實の個性は辯證法に由つて規定する能はざる物自體の世界に源を發する。勿論ヘーゲルは其論理學の立場から、カントの物自體が其成立に外的なる反省を含み、從つて其本來の假定に反して自ら屬性を有するといふ矛盾に陷るに拘らず、之を終局の基礎として其抽象的空虛を固執するものなることを非難し (Hegel, Logik II, S. 132; Encyclop. S. 135—136) カントやフィヒテの Idealismus が眞に彼岸にあるものを消滅せしめて之を自己の中に擧揚し、完全に自我を ideel とする能はざるものなることを其缺點として指摘して居る (Logik I, S. 181)。併しながら彼のイデーが凡ての對立を其內に止揚せしめた具體的普遍として現れるのも、唯論理的形式の規定に關する限り然るのであつて、其內容の個性に關しては論理的規定を超越する超論理的起源を認めなければならぬ。彼

の論理學は單なる形式の論理學ではない、內容と一つになれる形式の論理學である、內容も思惟に由て生產せられるのであつて、思惟の外に存在するものではない、存在と思惟とは同一であるといふのが彼自身の主張であるけれども(Encyclop, Einleitung)併し其所謂內容は論理的思惟の內容であつて、其謂ふ所の存在とは論理的思惟の對象としての存在である。自我の純粹活動の生產卽ち原直觀の內容は到底論理的思惟の規定すべからざる個性と偶然性とを有し、論理以前に其基となるものを豫想する。論理的認識は此處に其限界を認めなければならぬ。如何に彼の具體的普遍を以てするも到底論理の規定は直觀に對し抽象的たることを免れない。

啻に右の如く直觀の內容、純粹事行の生產が辯證法の規定する能はざる偶然的の個性を有し、論理學の限界を成すばかりではない。意識の發展、純粹事行の活動の內面的關係自身にも實は論理學の規定し得ざる論理以上の方面が存するのである。曩に余はフィヒテの知識學が認識と道德とに客觀化せられた規定を主觀化により再構成的に原體驗に還元する方法に於てのみ可能なることを述べたが、ヘーゲルの論理學は卽ち其認識に現はるゝ自我活動の理的方面を概念化するに止まる。理以外の自我活動の內面的關係は之に由つて概念化することは出來ないのである。此等

の方面は道德を始め藝術、宗教に客觀化せられる規定を主觀化する先驗心理學の方法に於て再構成的に直觀することに由つてのみ、客觀的に妥當なる知識となることが出來るであらう。然るにヘーゲルは飽くまで主知主義の立場から、此等の理想的客觀內容をも辯證法に由つて規定し得らるゝ理の發展段階と解し、汎論理主義を徹底した。併しながら此は善美聖等の理想を眞に從屬せしむるものであつて、到底正當なる立場と認めることは出來ない。例へば道德に於ても、ヘーゲルは善をカント、フィヒテの如く終に當爲に始終して永久完全に實現すべからざる形式的の理想と認める立場(道德的最惡觀)に反對し、之を以て現實なる內容に漸次實現せられて行く理の一段階と考へたのであるが(道德的最良觀)斯かる見解は假令道德の內容的規定が前述の偶然的なるものの個性に依存するといふ點を暫く觀過するも、猶我々の眞の道德的體驗を滿足せざる一面觀に過ぎざる事は否定出來ない。道德は主知主義の立場から辯證法に由つて規定し盡す能はざるものを本質とする。却て論理も自我の理想的活動の一面として道德に依屬すると考へられる。實踐理想の上位は依然として維持せられねばならない。曩に述べた如く自我の本質は意志である。意志は思惟に對し高次のものであるから、其規定たる道德は到底思惟の達する能はざる

超論理的のものでなければならぬ。論理の規定は唯自我の活動の理的方面に止まる。理は意志の抽象的一面に過ぎない。彼を知るも此を完全に知ることは出來ない。意志たる自我の活動は先驗論理學を以て規定すべからず、唯道德、藝術、宗教の客觀的規定を主觀化して再構成的に直觀する先驗心理學の立場のみ之を知らしめる。ヘーゲルの論理學は自我の活動の論理的概念化としては唯一の方法を與へるものであつて、其組織はフィヒテの知識學よりも遙に完全なるものなることを認めなければならないが、後者に對し限界をなせる意識內容の個性が同時に前者に對しても超へることの出來ない限界をなすばかりでなく、意識發展の內面的關係自身に於てもヘーゲル論理學の概念化する能はざる超論理的なるものがあるのである。曩に余がフィヒテの知識學とヘーゲルの論理學とを互に Kehrseite をなすと云つたのも其は理の一面に限るのでなければならぬ。前者は後者より精細なると同時に其より狹き範圍に止まるものなることを認めなければならない。

＋

ヘーゲルは已に前に述べた如く論理學の內容を成す理 an sich が自ら其反對の an-

dersein に移り自然哲學となり、再び之に於て in sich reflektieren し an u. fürsich の段階に發展して精神哲學となることを主張するのである。此は一應道理あることであつて、余は其が或意味に於て正當なることを認めるに躊躇しない。而して自然哲學に於ては Mechanik Physik Organik の三段を分ち、自然認識の抽象より具體に發展する過程を明にしやうとして居るが、此も自然科學の論理の上から見て正當なるものであると思ふ。併しながらヘーゲルの自然哲學の正當なる範圍は其が純粹思惟の立場から自然科學の論理を發展せしめんとする限りに止まる。自然哲學は自然科學の論理としてのみ、正當の根據を持つ。固より此處に所謂論理とは批判主義の考へる如く單に自然科學の認識論的、方法論的豫想といふ意味に限るのではない。自然科學も實在としての自我の活動の生産である。論理とは此自我の活動に形式的規定を意味するのであるから、自我哲學は自然科學を生産する自我の活動の形式的表現と自して我の形而上學の一部となる。併し此は何處迄も自然科學を生産する自我の活動の形式的規定に限る。之を脱して直接現實を規定する自然の哲學たらんと欲するに及んで、思惟は其辯證法的形式の立場を離れて、感覺的直觀の內容自身を取入れなければならぬことなり、此處に自己の正當なる範圍を脱することとなる。ヘーゲ

ルが種々の自然現象を強いて正反合の關係に排列しやうとして、シェリングの自然哲學と共に自然科學者の侮蔑を買ふやうになつたのは之が爲めである。自然現象は意識の內容、純粹事行の生產を俟つて始めて與へられるのであつて、純粹思惟により演繹し得べきものでない。後者の辯證法に由り演繹し得る所は唯意識の發展、純粹事行の論理的形式に止まる。內容其物に關しては唯內容自身を俟つて思惟の構成が可能となるのであつて、此が經驗である。而して自然といふのは意識の發展に於て活動の方面を度外視して唯其內容の方面を客觀化したものであるから、縱令其構成の一般形式が論理的思惟に由つて與へられるとしても、其完全なる認識が辯證的論理の能くする所でなく、經驗のみを能くすることは當然といはれなければならぬ。唯其認識の形式を論理的に發展せしめんとする限りに於てのみ正當と認められる自然哲學を以て、之を完全に規定することは出來る筈のものでない。自然哲學は唯自然科學の方法論的形式を純粹論理の立場から發展せしむることが出來るばかりであつて、自然の認識に直接關與することは出來ないのである。然るにヘーゲルの自然哲學は自然科學の論理に滿足せずして、經驗的自然現象其物の辯證法的演繹を企て、其が爲めに一方に於ては自己本來の立場からは許されざる經驗の混入を試み、

他方に於ては經驗事實其物を隨意に變更捩曲することを敢てした。自然哲學がヘーゲル哲學の最も著しき弱點として種々の非難を蒙つたのは正に此爲めである。彼自身自然の直接具體的なる現象が必然的なる論理の規定のみにて盡す能はず、偶然なる外的規定に俟つ所あることを認め、而して之をイデーの外化として唯抽象的なる一般概念規定を維持するのみに止まり、特殊の具體的なる性質は之を外的規定に委ぬる所の自然の無力に歸して居るが(Encyclop. S. 210)其所謂「自然の無力」は他方からいへば卽ち「理性の無力」に外ならない。自然の哲學としては理性は其無力を承認しなければならないのである。而して若し自然哲學が自然の哲學でなく自然科學の哲學であるとするならば、其概念は實は論理學の Lehre vom Begriff の第二部 das Objekt に屬するものであつて、現に余が曩に其正當なることを認めた自然哲學の三部門 Mechanik' Physik' Organik の關係は das Objekt の三段階 Mechanismus, chemismus' Teleologie に相當し而して前者に於て正當に辯證法に由つて規定し得られる所は後者に於て之を演繹することが出來、後者に於て演繹せられざる前者の規定は實は經驗的認識の混入に基くものではないかと思ふ。

此缺點は實は啻に自然哲學のみに限るのではない。精神哲學にも同樣の事があ

る。論理學の對象たる理卽自と云ものは純粹事行の行の方面、意識發展の活動の方面のみを唯其論理的形式の側から見たものであつて自然哲學の關せんとする所の自然は其反對の事の方面、意識發展の內容の方面を抽象したものなること今述べた如くであるが、精神は卽此兩者の綜合、卽ち內容ある意識の發展活動、具體的なる純粹事行に外ならない。此點から見てヘーゲルが論理學、自然哲學、精神哲學の關係を、此節の初に述べた如く解したのは正當である。併しながら、精神が右の如きものであるとするならば、精神哲學に於ても自然哲學に於けると同じく、唯辯證法のみに由つて演繹すべからざる現實の個性に關係する限り、經驗的認識の混入を防ぐことが出來ないのは當然である。唯精神の場合に於ては辯證法に由つて規定せられる發展の側が自然の場合に於ける如く度外視せられて居ない爲め、精神哲學は自然哲學の如く著しき破綻を暴露しないだけである。併しながら其辯證法的演繹の能く規定する所は唯だ精神發展の形式に止まり、現實の內容に關して規定する所は陰に之を事實の經驗に仰ぎ、ウインデルバントの所謂 Kryptogamie mit dem empirischen Wissen(Windelband, Gesch. d. n. Ph. II, S. 322)を犯して居ることは蔽ふことが出來ない。精神哲學の三部門中正當に辯證法的演繹を許す規定は實は論理學の Idee の三段階に盡さるべきもの

であつて、然らざる規定は經驗に基くものなること自然哲學の場合に於けると同樣ではあるまいか。唯精神の場合には精神が自我活動の具體的過程なるに由り、自然の場合に其認識が自然科學として哲學の實在認識に對立するのと異り、精神の認識は卽ち精神の自覺たる論理的自己規定として實在の哲學たる論理學其物に屬するのである。斯くて余は自然哲學も精神哲學も實は論理學の外にあるべきものでなく、論理學の最も具體的段階たるLehre vom Begriffの最終の二部das Objekt と die Idee とに歸すべきものであると思ふ。Idee ならぬ、內容あるGeistは純粹論理の完全に規定し得る所ではない。加之イデーとしての精神の規定は理其物の自發自展としてフィヒテの理論的知識學のKehrseiteに屬し、正當なる根據を有すること疑無しが、自我の本性、精神の本質は理たるイデーに盡さるものでなく、其意志である。意志は理より一層具體的なる高次のものであつて、後者は前者の一面に過ぎない。其故理の立場に始終する論理學を以て精神の具體的發展全體を完全に規定することは假令形式的にも亦不可能といはなければならない。精神哲學は啻に其自我活動の生產の方面に於て自然哲學に於けると同じく經驗的認識を混入しなければならないばかりでなく、活動の過程其物に於ても理以上の境地に對しては實は其無力を承認しなけ

ればならないのである。論理の立場より道德、藝術、宗教を論ずるも其は其等の精神活動に內在する理の一面に限り、其全體に及ぶ能はざることは當然である。此等のものは夫々理以上の本質を以て獨自の境を開くのである。ウインデルバンドが Die Erneuerung des Hegelianismus の論文に於て、ヘーゲルの辯證法に由り凡ての理想價値を內的必然の分化關係に於て理解せんとするの危險を警戒したのも至當のことといはなければならぬ (Windelband, Präludien, I, S. 274–275)。然るにヘーゲルは此限界を認めず却て論理の內に一切の精神活動を包容しやうとするのは、恐らく論理主義の僻見であらう。理以上の境地に屬する精神の活動は之を客觀化する道德、藝術、宗教等を先驗心理學の立場から主觀化して知的に直觀する外認識の方法は無い。自我の活動は辯證法を以て規定すべからざる方面を有し之に由つて規定し得る所は唯理の一面に限るのである。而も其規定は單に形式的に止まらざるを得ない。ヘーゲルの精神哲學は此等の制限を承認する時必然論理學の一部に歸することとなり、曩に余が其道理あることを認めた論理學に對する自然哲學、精神哲學の關係は卽ち論理學の Lehre vom Begriff の二段階 Das Objekt 及び die Idee として正當に理解せられるであらう。ヘーゲルの哲學は畢竟論理學に外ならない。彼が此領域を超へた爲めに

幾多不純の要素を、混入して、却て其眞正なる精神の深き意義まで共に棄却せられる運命を招いたのは遺憾といはなければならぬ。

今述べたやうなヘーゲル哲學の制限は其歴史哲學に於て最も著しく現はれて居る。歴史は實在發展の跡を直觀して之を經驗的認識の概念により各段階の個性と其相互關係とを明にする如くに客觀化せんとするものである。其對象とする所は單に實在發展の內面的一般關係ではない、況や其理的一面の發展關係ではないのである。然らずして現實の個性を含む發展の過程全體を客觀化せんとするのが歴史の目的である。其故之に對しては辯證法は唯其方法となる思惟の形式概念を論理的に發展する事が出來るに止まり直接內容に關與する事は出來ない筈である。內容は辯證法の演繹の及ばざる個性を有し、而して其發展の過程にも辯證法の規定する能はざる內面的關係が存する。約言すれば辯證法は實在發展の形式の一面、理の自己表現たる歴史の論理としてのみ妥當であつて、所謂歴史的事實の內容と其關係の超論理的方面とを規定することは出來ないのである。然るにヘーゲルは此制限を無視し、先づ第一に實在發展の內面的關係は全然論理的であると假定し、而して第二に發展內容の個性も辯證法に由つて演繹し得るものと考へて其歴史的哲學を組

織したのである。其結果は自然哲學の場合に於けると同じく恣に事實を曲げて辯證法形式に適合せしめたばかりでない、歴史を通じて自己を實現する所謂世界精神を單に理の一面のみより考へ、精神哲學に於ける唯理主義と關聯して歴史の唯理主義を採らなければならなかつた。其に由りカントに於て單なる規制的原理に止まつた文化的合目的性が、ヘーゲルに於てはプヒテに於けると同じく構成的原理となり、而も其内容が辯證法に由つて規定せられ、世界進行の過程に於て實現せられるものと解せられて居るが、實は此は唯理主義の結果なのであつて、若し實在が辯證法のみに由つて規定し得られざる形式と内容とを有するものなる事を認めるならば斯かる合理說、最良觀は維持することが出來なくなるのではあるまいか。歴史哲學も歴史的事實の哲學でなくして歴史的精神の理的一面の自覺たる歴史の論理でなければならぬ。論理學の Idee 外には出でないと思ふ。辯證法は自然科學や歴史を生産する實在としての自我の活動の形式を理の一面から規定し得るのみであつて、自然と歴史との事實を直接に規定することは出來ない。現實は實在發展の自由なる活動に由つて始めて現實となるのであつて、其内容は論理の透徹し得ざる絶對偶然に屬し、論理は唯其活動の形式の一面たる理の自己表現に止まらざるを得ない。實

在の具體的なる全體を完全に論理的に規定して、何故に世界が吾人の經驗的認識に現るゝ如く現にあるかを現象の根柢たる實在に由り理解しやうと試みることは到底失敗に終らざるを得ないのである。ヘーゲル哲學は論理學に始終し、唯實在發展の活動の一面たる理の內面的關係の自己表現以上に出でない。其範圍に於ては此は前に述べた如く本質的の意味を有し、不朽の價値を維持すべきものであらう。余はヘーゲルの汎論理主義の哲學的認識の問題に對する意義を、斯く解したいと思ふ。

辯證法の發展する範疇が單に認識の形式でなく實在の形式であるといふことは眞であるけれども、其は唯實在の一面の自己表現たるに止まり、絕對意志たる實在は理以上の方面を有し其發展の內容は自らも知る能はざる神秘の境に其の基を有する。フィヒテの知識學が正當に立せられ得べき方法を與ふる先驗心理學は理以上の實在活動の方面に就いて其內面的關係を敎へることは出來るけれども、凡ての自我活動の生產卽ち其はたらいて始めて直觀せらるゝ實在の內容其物に至つては全然偶然的自由なるものであるから、普遍必然的の認識たることは出來なかつた。ヘーゲルの論理的唯心論は其半面に直觀を豫想するのみならず、其立場から開展する所は唯實在の理的一面の形式的規定に止まり、知識學と同じく(否之よりも一層大なる)

制限を有し、勿論實在の內容的發展其物を規定することは出來ない。此は恐らく凡ての哲學的認識を超越するものであつて、唯藝術のみ之を客觀的に表現することが出來るのであらう。獨逸唯心論の哲學も終にカントの場合と異る意味に於て物自體の制限を承認する外無い。余は哲學の業が單なる批判に終るものでなく、カントの批判哲學は當然フィヒテの知識學からヘーゲルの論理學に發展すべき契機を藏し、而して此等の自我或は精神の形而上學卽ち唯心論が實在の認識として正當の根據を有することは否定出來ないと思ふのであるが、同時に其哲學も亦實在の一方面の認識たるに止まり、不可知の深淵たる物自身を承認しなければならぬことを主張せざるを得ない。余は此が又一般の哲學的認識の制限であつて、現代の哲學に於ても同樣の事を認め得ると思ふ。今日最も徹底せる論理主義の立場から思惟の生產を說き、其思想の發展に於ても辯證法的の組識を示して居るのは曩に述べた如くコーエンの純粹論理學であるが、其所謂生產が實は思想の形成に外ならず、思惟の根原の法則に由る綜合的發展が其背景に直觀の非有を豫想するものなることは已に一般に認められて居る。而して其論理學の思惟は終に數學から自然科學の方法を開展するに止まり、直觀の內容を無視すること能はざる經驗の事實を演繹する能はざる

ことは、正にヘーゲルの論理學に於けると同樣である。又コーエン學派が自然科學の論理に偏するに對して、此カントに淵源する批判哲學の缺を補つて歷史の論理を完成せんとする西南學派の認識論も、亦其基に直觀體驗を豫想して始めて現實の認識を說くことが出來るのは其派のリッカート自ら承認する所である。斯かる先驗論理學に對し直觀、體驗の學としての先驗心理學の可能を更に深く論じたのはコーエンの後繼者ナトルプであり、而して此等の新カント派と系統を異にする墺國派の立場から、一方に於て純論理主義を唱へると同時に、他方に於て體驗の內面的關係としての「本質」を明にせんとする研究を批判哲學の諸部門の基礎たらしめんとするフッサールの現象學は、正にナトルプの先驗心理學の方法に於てのみ可能なるのであると思はれるが此が論理學の基礎となるといふことは、恰もフィヒテの知識學がヘーゲルの論理學の半面に要求せられるのに相當するといふことが出來やう。而して已に斯かる直觀體驗の學を認めることになれば、曩にフィヒテの知識學に就いて述べたやうに哲學は單に批判としての我の學でなくして實在の學としての我の學となるのである。先驗心理學、現象學は卽自我としての實在の形而上學に外ならない。今日實在の直觀的認識を形而上學として主張するベルグソンの立場も、先驗心理學の方

法に於てのみ認識となる事が出來るであらう。氏の思想はフィヒテの立場を通して見るより其深き意義を發揮することが出來ると思ふ。斯くして現代の哲學は復カント、フィヒテ、ヘーゲルの古典的哲學を一層細心なる形に於て再現して居ると見られる。而も此等の新しき哲學に對しても其先行者に對して存在した認識の制限は消滅しない。否此等の制限を古典的哲學よりも一層明に認めて、自己の權限を遙に謙遜に自覺して居ることが現代哲學の特色なのである。我等も亦此許されたる範圍に於ては批判のみならず、進んで形而上學の組識を志すのでなければならぬ。批判をして架空の論議に終らしめまいとすれば、其は必然形而上學に導く。哲學を我の學といふのは單なる批判でなくして形而上學としての我の學といふ意味に於てでなければならぬことは獨逸唯心論の發展が我々に敎へる所である。(完)